



More Islands, More Fun Donna Lampa

“It’s more fun in the Philippines.” My home country’s Department of Tourism has been using this catchy slogan since 2012 to entice both locals and foreigners to explore the many wonders our 7,641 islands have to offer. Yes, you read that right. With more than seven thousand islands, we have more than we know what to do with!

This actually makes life in the Philippines more fun and interesting. We’re never too far from the beach regardless of where we are in the country. Like Hokkaido, we enjoy a diversity of fresh seafood, fruits, and vegetables all year round. Cuisines vary from region to region, depending on what’s abundant in that part of the Philippines. People from Baguio, for example, put strawberries on almost everything (even silken tofu!), while coconut milk and spicy red peppers figure prominently in dishes from the Bicol region.

We collectively speak a little under 200 languages and dialects, and as you can imagine, this sometimes leads to problems understanding each other. So we find creative ways to communicate with countrymen with a different mother tongue using facial expressions, gestures, dance, and even songs! I’d like to believe that’s the reason why Filipinos are musically-inclined and animated. The Philippines is also very similar to Japan in terms of the immense number of festivals being held throughout the year. We have celebrations for everything, most of which are tied to religion or the farming season. We call them fiestas and hold them to showcase local culture, Catholic traditions, roses in bloom, a bountiful harvest, and even hot air balloons!

We surely know how to have fun in the Philippines, and I can’t wait to warmly welcome you to one of my home country’s 7,641 sun-kissed islands someday.

【ちょっと豆知識】宮地晶子

“diversity (ダイバーシティ)”という言葉が出ました。「多様な」と訳しました。もともとは、アメリカで人種差別や性差別に対する人権意識から出た概念。日本では「人種、性別、年齢、信仰などに関わらず人材を生かす」の意味合いで使用。基本理念にうたう日本の大手自動車メーカーもあり、今や多くの企業が意識していますね。

島多ければ、楽しみ多し ドナ・ランパ

(訳:宮地晶子)

「フィリピンならもっと楽しい」。国内外の人を7,641ある島の不思議探検に誘うキャッチフレーズ。2012年から国の観光局が使っています。そう、そうなんです。7,000以上も島があつて、どうしていいかわからないくらい。

でも、おかげでフィリピンの暮らしは、いっそう楽しく面白い。国中どこでも、ビーチが遠過ぎず。北海道と同じで、一年中多様で新鮮な魚貝、フルーツ、野菜を楽しめます。その地方の特産によって料理も変わります。例えばバギオでは、ほとんど何にでもいちごを乗せます(絹ごし豆腐にも!)。一方、ビコル地方では、ココナツミルクと辛い唐辛子が際立ちます。

200近い言語や方言を話す私たち。同じ国の中でさえ理解できないこともあります。そこで、見つけた創造的なやり方が、表情やジェスチャー、ダンス、歌なのです。だからフィリピン人は音楽好きで活気に溢れているのかもかもしれません。

1年中どこかで祭りがあるというところが日本ととても似ています。あらゆることに祝い事があり、そのほとんどが宗教が収穫に関わることです。これらはフィエスタと呼ばれ、地元の文化、カトリックの伝統、バラの花々、豊作、果ては熱気球に至るまでさまざまです。

とにかくフィリピン人は楽しみ上手。太陽に口づけされた7,641カ所の島々に皆さんを温かくお迎えしたくありません。

英語教育指導員 宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第143回

I care.

先日、京都でレストランに行きました。椀(わん)ものの蓋が開かなくて苦戦していたら、着物を着た仲居さんが英語で「プル(引っ張って)」と教えてくれました。とってもキュートな中国人女性でした。

目の前で抹茶を点てもらいながら、気分は複雑。まあ大阪、京都はどこへ行っても、もう東南アジア状態。大阪の黒門市場なんて、呼び込みをしているのも買い物をしているのも中国の人、残り半分は韓国の人、という感じ。東

川町にも負けず劣らず外国の方がいるので、なんとも不思議な状態。いろいろ思うところはある、という方もいるかとは思いますが、せっかくですもの、仲良くしたいものです。

まずは怖がらずに声をかけたいですね。でも「日本語を話せる」レベルはいろいろ。「道を聞ける」程度から「自分のことなら話せる」「直接話しかけられたら分かる」「職場の業務用語も分かる」、さらに一歩進んで「目の前で複数の人が自分に関係のない話をしているも分かる」レベルまで。相手がどのくらい日本語を話すかわからないと、声をかけづらい、ということもあります。

何かの縁で出会ったのです。相手は「話をしたい」と思っているはず。あまり考え過ぎずに声を掛けましょう。何語で話し掛けるか、なんてこの際関係ない。全部日本語でもいいと思います。「I care. (気にかけていますよ)」と態度で示してあげましょう。